小学校社会科概念探求学習の創造(3)

——教授書試案『米作り最前線』を中心に——

社会科教育教室　小　山　直　樹

Creation of Concept-Inquiry Learning of Social Studies in elementary school (3)
—centered in The Teaching Guide『The front of rice crop』—

Naoki KOYAMA

I　はじめに

本稿は，拙稿①「小学校社会科概念探求学習の創造－『トヨタ生産方式の秘密』学習と『クロネコヤマト宅急便快進撃の秘密』学習を中心に－」（全国社会科教育学会誌『社会科研究』第39号，1991年），および②「産業学習における主要概念」（岩田一彦編著『東京書籍TMシリーズ・小学校産業学習の理論と授業』東京書籍，1991年），③「情報化と産業学習－情報管理がものをいう宅配便事業－」（同前），④「小学校社会科概念探求学習の創造(2)－1992年度使用教科書分析と主要概念構造図を中心に－」（『社会科研究』第40号，1992年），⑤「豊かな時代の中の社会科－日本型供給方式を視点にした新産業学習開発の試みから－」（全国社会科教育学会誌『社会科教育論叢』第39号，1992年）に続くものであり，実験授業の構成概要およびそれを踏まえて作成した最新の教授書試案の報告が目的である。

II　実験授業「君たちはコシヒカリを知っているか」（「鳥取県の農業－米の生産」）における教材解釈・授業構成

教授書試案作成に有効な授業事実を提供した実験授業における教材解釈と授業構成を述べる。

1　教材解釈

田中俊男教諭との共同研究に成る「君たちシリーズ第二弾・君たちはコシヒカリを知っているか」実践は，1988年５月，鳥取大学教育学部附属小学校５年１組で実施された。当時の学習指導案を資料にして，教材解釈を抽出してみよう。

1966年，悲願の米自給を達成した日本では，たちどころに生産過剰になり，生産調整・転作が課題とされた。生産量や水田面積が制限される中で，「よく売れる米，高く売れる米」の生産が追求され始めた。

鳥取県は，第一次産業の比率が７％と，全国（３％）に比べて高い。第一次産業就業人口中の農業就業人口の割合は93％，第一次産業総生産額中の農業生産額の割合は約75％，その中で米の生産額は34％である。米出荷県・鳥取県が早急な対応を迫られたことは言うまでもない。

その具体的な取り組みの一つが，コシヒカリの増産である。主要出荷市場の大阪市場では，Ａランク米はコシヒカリが主力であり，コシヒカリ栽培比率が低い鳥取県は厳しい状況に立たされていた。そこで，1986年には1094ha(5.4％)の作付に過ぎなかったコシヒカリを，1990年には5000ha(27.5％)に拡大する計画を立てた。本実践の試行はまさしくその渦中にあった。そこで，鳥取県における米作事情を「よく売れる米作り，高く売れる米作りの典型的事例」と捉えた。単元目標で表現すれば，「売れる米作りということから，需要者の嗜好にあったものを生産していることがわかる(鳥取県の米の生産活動は，市場の制約を受けていることがわかる)」という解釈を行った。加えて，以下に述べる解釈も行った。

コシヒカリは幾つかの問題点が指摘されている米である。一つは，劣等品種であるということである。収穫を上げようと，肥料を多めに施すと丈が伸びて倒伏しやすくなる。イモチ病に弱い。病気を抑えるために農薬使用量も増える。肥料を控えると収量は期待できない。作りにくい米なのである。台風の際に，日本晴は倒れなくてもコシヒカリは倒れると農家から声が出ている。二つには言われる程に味に優れているかということである。相対性を免れない食味評価であるが，コシヒカリも例に漏れず，日本穀物検定協会食味ランキングでもうまい米・まずい米のそれぞれにランクされている。炊き方や使用する水，さらには料理次第で長所短所があり，絶対的評価は定まらない。さらに三つには，おいしいと言って食べているコシヒカリが本当にコシヒカリであるか，100％米である保証が無いということである。新潟県産コシヒカリの生産量は30万ﾄﾝ，消費量は100万ﾄﾝ と言われている事実（当時）は，明らかに混米，ブレンド米の横行を物語っている。30％混ぜればコシヒカリの味がすると言われる米である(注1)。

これらの問題点から，「消費者のコシヒカリ，ササニシキに対する人気が高いことがわかる」「卸売業者，小売業者にとって儲けの多い米であることがわかる」「需要者（消費者）の嗜好に合わせるので，必ずしも適地適作にはならないことがわかる（コシヒカリは倒伏しやすく，病気にも弱い作りにくい米であることがわかる)」「作りにくいので農薬も多く使用されやすい米であることがわかる」という単元目標から読み取れる解釈も行った。

2　授業構成（学習指導案・学習資料）

子どもたちは「自分が食べている米は？」という問いにもとずき，生活センターを何度も訪ねたり，米穀店から各県の銘柄米を紹介したポスターを収集してきたり，食糧事務所を訪ねたりしてきている。その中から，「なぜ，自主流通米と政府米に分けるのか」「なぜ，政府米の値段は政府が決めるのか」「なぜ，米の種類はたくさんあるのか」「どんな品種改良をしているのか」「なぜ，政府米が売れなくなったのか」「鳥取県産のコシヒカリの生産量はどれくらいか」「なぜ，日本晴は作付面積は一番なのに，あまり聞かないのか」「なぜ，主な品種をヤマヒカリからコシヒカリにして，ヤマヒカリを減らすのか」といった問いを持ち始めていた。

そこで，これらの問いにもとずく個別学習内容を踏まえて，コシヒカリ増産計画の謎に迫る授業構成を採用した。学習指導案における「全体の構想（５時間)」と「本時の構想」，「学習の手引き」「ヒントカード」の一部，そしてファイル資料名一覧（教室データバンクに常備）を再録しておこう。

〈全体の構想（5時間）〉

米を比べよう。　〈一斉〉　本時　2時間

おいしいと思うのは　高いのは

コシヒカリについて知っていることを発表しよう。　〈一斉〉

家で食べている　おいしい　高い　新潟が有名

鳥取県で、作付け面積の約3分の1をコシヒカリにしようとしているのは、なぜだろうか？　〈一斉〉

コシヒカリはおいしい米だから　コシヒカリの方が作り易いから
コシヒカリを食べる人が多いから　コシヒカリがもうかるから

学習計画を立てて、自分の問いを追究しよう。　〈個〉

米の味を調べよう　コシヒカリの特性を調べよう　コシヒカリ作りの作業を調べよう
コシヒカリに適した気候を調べよう　コシヒカリに適した土を調べよう
コシヒカリの値段を調べよう

追究して分かったこと、新たに生まれた問いを話し合おう。　〈一斉〉

味は産地、炊き方によって変わってくる　同じ米でもおいしいと思う人やまずいと思う人もある　コシヒカリは倒れ易い米だ　コシヒカリは倒さないようにするのが難しい　コシヒカリは高く売られている　どうして高いのだろう
なぜコシヒカリを増やすのだろう

コシヒカリ・ササニシキの流入量よりも消費量が多いのはなぜだろう？　2時間　〈個・一斉〉

おいしい米は、コシヒカリ・ササニシキだと思っている人が多い
コシヒカリ・ササニシキに人気があるので、コシヒカリ・ササニシキを売りたい
コシヒカリを3分の1混ぜるとコシヒカリの味がする　他の米が混ぜられている

コシヒカリが高く売れるのはなぜだろう？

コシヒカリは味が良いと評価されている　消費者の人気があり、需要量が多い
自主流通米で、政府米のように価格が決められていない
お米屋さんが売りたい米である

コシヒカリの作付け面積を増やすわけをまとめよう。　1時間〈一斉〉

コシヒカリは消費者の需要にあっている
自主流通米で需要が多いので価格が高い
奨励金も高い

君はコシヒカリを食べますか？

〈本時の構想〉

米を比べよう。　〈一斉〉

（A新潟コシ　B鳥取コシ　C鳥取中米）
おいしいと思う順番に並べよう（根拠をはっきりさせて）
高いと思う順番に並べよう

コシヒカリについて知っていることを発表しよう。　〈一斉〉

家で食べている　おいしい　高い　新潟が有名

鳥取県で、作付け面積の約3分の1をコシヒカリにしようとしているのは、なぜだろうか？　〈一斉〉

・予想を立て発表する　・予想の理由を話し合う　・予想変更をする

コシヒカリはおいしい米だから
コシヒカリの方が作り易いから
コシヒカリがもうかるから
コシヒカリを食べる人が多いから

学習計画を立てて、自分の問いを追究しよう。　〈個〉

米の味を調べよう
食味の基準を調べよう

コシヒカリの特性を調べよう
コシヒカリ作りの作業を調べよう
コシヒカリに適した気候を調べよう
コシヒカリに適した土を調べよう

コシヒカリの値段を調べよう

コシヒカリの消費量を調べよう

追究して分かったこと、新たに生まれた問いを話し合おう。　〈一斉〉

味は産地、炊き方によって変わってくる
同じ米でもおいしいと思う人やまずいと思う人もある
基準には味以外に外観、硬さなどがある

コシヒカリは倒れ易い米だ
コシヒカリは倒さないようにするのが難しい
コシヒカリでは農薬を多く使うところもある

コシヒカリは自主流通米で政府は値段を決めない
コシヒカリには奨励金も高い
コシヒカリは高く売られている

流通量より消費量のほうが多い

不足分の米は一体何だろう？　どうして高いのだろう？

＜学習の手引き・ヒントカード（一部）・ファイル資料名一覧＞

手引き１；～コシヒカリの味を追求する人に～

＊　自分一人だけで食べて「コシヒカリはおいしい米だ」とは言えませんね。かと言って，たくさんの人に聞いてまわるといってもたいへんな手間ですね。

・味にくわしい人は？　・味にくわしい職業の人は？　・味についての調査，アンケートなどは？　・「おいしい米」と決めている人，所は？

といった追求ができますね。

＊ 同じ人が同じ料理を作っても同じ味というと，むつかしいですね。

・炊き方で違いは？　・産地(作られたところ)の違いは？　・料理の種類による違いは？

といった問いも出てきそうですね。

他にもいろいろな問いが浮かんできたと思います。後は自分のアイディアで。何を，どんな順で，どんな方法で調べますか？

カード１；～コシヒカリの味を追求する人に～

・「米の味⑤」「米の味⑥」を調べましょう。

・「米の味⑦」「米の味⑧」「米の味⑨」を調べましょう。

・「米の味③」を調べましょう。

※　誰がランキングを作っていますか？　※　どんな基準で順位を付けるのですか？

※　どんな方法で検査しますか？

あなたの結論は，

コシヒカリは　［　　］

手引き３；～コシヒカリのもうけを追求する人に～

＊　モノの値段にもいろいろありますね。「レモンをお金に変える法(正・続)」を読んだ人にはよくわかっているかもしれませんね。コシヒカリの値段といってもいろいろ考えることができます。

・農家が売る値段　・おろし業者が売る値段　・小売業者が売る値段

あなたが調べたいのは，誰のもうけですか？もちろんみんな調べてみるのもいいでしょう。

＊　米には自主流通米と政府米があったのを覚えていますか？コシヒカリはどちらが多いのでしょう？政府米は政府が値段を決めていましたね。では，自主流通米はどうでしたか？値段の決まり方が違ってくるので，重要な点ですね。

他にもいろいろな問いが浮かんできたと思います。後は自分のアイディアで。何を，どんな順で，どんな方法で調べますか？

カード３；～コシヒカリのもうけを追求する人に～

次の資料を読みましょう。・「米とお金①～⑥」
・「鳥取県主要農作物累年統計」
・「鳥取県昭和61年主要農作物の生産状況」

ファイル資料名一覧

A－1　米の味①都会の米はなぜまずい；「食生活のガイドブック」
A－2　米の味②米の食味ランキングをつけるのは；「コシヒカリは危ない」
A－3　米の味③食味ランキングの基準；「コシヒカリは危ない」
A－4　米の味④山形県のおいしい米地域順位；「追跡コメ流通の内幕」
A－5　米の味⑤米の食味ランキング・Aランク米一覧；「コシヒカリは危ない」
A－6　米の味⑥おいしい順位，まずい順位；「地理のとびら」
A－7　米の味⑦同じ条件でたくと；「暮らしの手帖84」
A－8　米の味⑧産地による味のちがい；「暮らしの手帖84」
A－9　米の味⑨たき方を変えると；「暮らしの手帖84」
B－1　品種特性①鳥取県奨励品種の特性；水稲奨励品種特性表
B－2　品種特性②コシヒカリ(1)；「コシヒカリは危ない」
B－3　品種特性③コシヒカリ(2)；「コメ国家黒書」
C－1　農薬①防除暦；「農文協の農業白書」
C－2　農薬②コシササの大量栽培地帯と農薬；「コシヒカリは危ない」
C－3　農薬③コシササ農家で使われる農薬；「コシヒカリは危ない」
C－4　農薬④コシササの生長を抑える薬；「コシヒカリは危ない」
D－1　米とお金①米60kgの生産費；「追跡コメ流通の内幕」
D－2　米とお金②おろし小売店のもうけ；「追跡コメ流通の内幕」
D－3　米とお金③良質米への奨励金；「追跡コメ流通の内幕」
D－4　米とお金④自主流通米のねだん；「追跡コメ流通の内幕」
D－5　米とお金⑤福島県菅野さんの場合；「日本のお米」
D－6　米とお金⑥自主流通米と取り扱い手数料；「追跡コメ流通の内幕」
E－1　米の流入量と消費量①流入量より消費量が多いコシササ；「追跡コメ流通の内幕」
E－2　米の流入量と消費量②新潟コシヒカリのなぞ；「コシヒカリは危ない」
E－3　米の流入量と消費量③コシヒカリとヤミ米；「コシヒカリは危ない」
E－4　米の流入量と消費量④コメ屋さんにある米；「コシヒカリは危ない」
E－5　米の流入量と消費量⑤コシササを食べている人(東京)；「暮らしの手帖84」
E－6　米の流入量と消費量⑥コシササの流入量と消費割合；「追跡コメ流通の内幕」
E－7　米の流入量と消費量⑦新潟コシ出荷量と消費量；「コシヒカリは危ない」
F－1　米の品種①主なうるち米の系図；「主な水稲うるち品種の来歴」
F－2　米の品種②コシヒカリ・ササニシキの系図；「日本のお米」
F－3　米の品種③米の人気品種；「コシヒカリは危ない」
G－1　米の品質区分①類別品質区分の基準；「追跡コメ流通の内幕」
G－2　米の品質区分②精米の品質区分(鳥取)

H－1　鳥取県米の主要品種作付け面積の移り変り61―65；「鳥取県稲作の基本方針」
H－2　鳥取県米の主要品種作付け面積の移り変り62～65；「鳥取県稲作の基本方針」
H－3　鳥取県コシ作付け面積の移り変り；「鳥取県稲作の基本方針」
H－4　鳥取県米の主要品種作付け割合の変化；「図で見る鳥取米」
I－1　鳥取県昭和61年産米品種別販売状況～販売先；「図で見る鳥取米」
I－2　鳥取県米品種別販売状況～自主流通米・総出回り量；「図で見る鳥取米」
J－1　鳥取県61年産米生産と集荷実績；「図で見る鳥取米」
K－1　鳥取県主要農作物累年統計
K－2　鳥取県昭和61年主要農作物の生産状況
L－1　ササニシキ・コシヒカリだけが本当においしい米なのか；「暮らしの手帖84」
L－2　三度の食事の調査報告；「暮らしの手帖84」
M－1　鳥取県農業事情；「朝日新聞」

III　実験授業以後の「米作り最前線」事情と教材解釈の発展

1　鳥取県産コシヒカリの市場評価

1990年を最終年にした鳥取県コシヒカリ増産計画は順調に推移した。しかし，一方ではコシヒカリ・ササニシキの供給過剰も進行していた。さらに，1990年には自主流通米価格形成機構が東京と大阪で年４回の市場取引を開始した。10月30日開催の東京取引市場では，比較的価格の安い「北海道ゆきひかり」「北海道きらら３９７」「栃木初星」「茨城キヌヒカリ」が値幅制限の５％高（対89年産通常取引価格比）に張りついたほか，「福島初星」「富山コシヒカリ」など11産地銘柄が値上がりした。これに対して，過剰基調の「庄内（山形）ササニシキ」が3.9％下げたのをはじめ７銘柄が前年産取引価格を下回り，ササニシキ，関東産コシヒカリの不人気が目立った。

鳥取県産コシヒカリが登場した11月７日の大阪取引市場の結果は以下の通りであった。

上場された全国41産地銘柄（約５万５千㌧）のうち，午後４時までに32銘柄の価格が決定。「北海道産きらら３９７」「同ゆきひかり」がここでも５％高。東北産「ササニシキ」は軒並み値下がり。滋賀・鳥取・山口産コシヒカリは大量に売れ残った。一方，これまで不人気であった九州産米は，「ヒノヒカリ」が福岡産3.1％高，佐賀産1.8％高と堅調で，銘柄によって明暗を分けた。

「日本海新聞」は11月８日，13日の記事に「県産米不評－コシヒカリは46％売れ残る，基準価格にも届かず」「県産コシヒカリ大阪市場で思わぬ不人気，約半数売れ残る，迫られる新品種の開発」の見出しを付けた。見出しにもかかわらず，記事は「予期された結果」と報じている。県経済連自主流通米課長は「県産コシヒカリが関西市場の卸業者から絶対欲しいという米でなかった，ということが出来る」と語り，関係者は「コシヒカリは限界。鳥取県にもこれに代わる県を代表する産地品種の開発が必要」とコシ・ササ神話の崩壊を認めている。記者は「鳥取県は売れる米コシヒカリの積極的な増産に努め，今年度は過去最高の五千㌶で栽培，全水稲の三割以上を占めている。しかし，この取り組みも『他県産の評価を見ての取り組み』との指摘があるように，後発県との市場評価は入札結果からみても否定できない」「農協，県経済連に行政も含めて本気で取り組まねば鳥取県の米作りが取り残される」と厳しい分析をしている。

2　「北海道産きらら３９７」と，その販売促進戦略

鳥取県産コシヒカリと対照的な評価を受けた「北海道産きらら３９７」とは，一体どのような米であり，なぜいきなり人気銘柄米になりえたのであろうか。

『農業協同組合』誌（全国農業協同組合中央会）1991年10月号掲載の上木良一氏（北海道協同組合通信社編集部長）のルポルタージュによれば，きらら３９７の躍進はホクレンの多年にわたる米加工事業の成果に負うところが大きいという。具体的には，Ｂランク米（中間米）不足という市場の短期的事情と，外食産業の膨張を中心とした需要変化に，価格と食味のバランスのとれた新品種で対応した点にあるとしている(注2)。

辻和成氏（ジャーナリスト）の論考「北海道産『きらら３９７』はなぜヒットしたか」（ＮＥＸＴ誌，1991年７月号）は，この辺りを詳しく紹介している。①きらら３９７は「上育３９７」という1988年春に登録された新品種である，②早速，マーケットリサーチを行い，購入層は30才代から40才代前半の子ども連れのミセスであることが判明した，③電通をはじめホクレン以外のスタッフも動員して販売促進を図った米である，④ネーミングを公募し，20101通の中から僅か４通の「きらら」を採用した，173通あった「はまなす」を筆頭に「えぞひかり」「えぞにしき」「北の大地」「みちひかり」「雪の舞」といった昔ながらの四股名のような名や酒のような名を退けた，⑤商品名として三文字は弱いということから，「きらら」に開発番号の３９７を付け，「サンキューナナ」と読ませた，⑤「おいしさキラキラ，しあわせキラキラ」をキャッチコピーに，稲穂を手にした星の王子様風のキャラクター・きららちゃんをプリントした袋でメルヘンチックさを醸し出し，子どもたちを引き付けた，⑥テレビコマーシャルを含めて総額１億円の販促キャンペーンを行なった，⑦冷凍食品大手のニチレイの冷凍焼きおにぎり専用米に採用された，さらには大手コンビニエンスチェーンのすし弁当用ブランド米にも採用された，⑧コシヒカリを祖父に，道内で開発された「しまひかり」と「キタアケ」を交配し，その世代交代を繰り返すことで優れた特性を種として定着させ，誕生した品種であり，日本穀物検定協会の食味試験で新潟コシヒカリ，栃木コシヒカリ，あきたこまちに次ぐ第四位の評価を得て，宮城・山形のササニシキの評価を上回った，⑨北海道産米は大部分が国の品質基準でいう五類，つまり最低ランクに位置づけられているが，きらら３９７も五類扱いで登場したため低価格米である，⑩「作れば必ず売れるコメ＝コシ・ササ」という発想ではなく，「コメも商品」「消費者がうまいというコメを作らないと，もうコメ作りは続けられない」とする川下重視の戦略で生産から販売までを一貫させた米である，⑪1990年４月１日，「ありがとうございました。平成元年産『きらら３９７』は三月末日をもって販売店への出荷を終了させていただきました」というお礼と完売告知が新聞紙上を飾った，ホクレンと道内の米穀卸会社，米穀商団体，北海道当局など18法人・団体の連名によるものであった，米がだぶつく時代に，まさに異例のことであった，１ケ月ほどの間に，スーパー，生協，コメ屋の店頭にも「完売御礼」という大きな赤い文字が躍るポスターが掲げられた，道農政部農産流通課長・島氏は「これも販売戦略なんです」と笑う，ニセきらら３９７やニセきらら３９７の袋が出現したのもそれから間もなくであった。

以上の二氏の評価を裏付けるデータとして，北海道立道南農業試験場誌『創立80周年記念・最近の試験研究成果』（平成元年７月）と，『北海道立上川農業試験場年報』（昭和55年度～昭和63年度），

『北海道立上川農業試験場百年史』（1986年）がある。抜粋・要約して紹介しよう。

1980年度，道立四農試は「優良米早期開発」七ケ年計画をスタートさせた。品種改良・食味の基礎研究成果として，①「渡育２１４号」（晩早）が道南農試で育成を完了し，「しまひかり」として新品種に決定，②「道北３６号」（早中）が有望と，継続検討対象視され，次年度より奨決現地調査事業に配布することになった。「道北３６号」はのちの「キタアケ」であり，「渡育２１４号」と共に「上育３９７（きらら３９７）」の「両親」になる。「交配母本の両親」がこのようにしてまず登場した。

「上育３９７号」品種名が登場するのは84年度の年報からである。そして，87年度からスタートした「優良米総合開発試験」（国の水田農業確立対策実施に対応）に引き継がれ，「上育３９５号」（直播向専用品種）と共に農業試験会議に提出され，「奨励品種」となった。「良味及び加工用途に適した品種」（道産米のエース「ゆきひかり」を上回る良食味）であり「低コスト米品種」として期待されたのである(注3)。

88年には「上育３９７号中苗」生育・収穫データが年報に紹介された。

3　ニセ新潟魚沼産コシヒカリ事件・ニセ宮城産ひとめぼれ事件の意味

我々の教材解釈と軌を一つにする象徴的出来事に，ニセ新潟魚沼産コシヒカリ事件とニセ宮城産ひとめぼれ事件がある。

周知の通り，新潟県産コシヒカリの中でも最も，と言うよりも全国で最も人気が高く，高価格の米・魚沼産コシヒカリの偽物が，偽造された袋に詰められて東京都内などの小売店で販売された。新潟県警は全国に広がる「ニセ米事件」として捜査本部を設置し，捜査に乗り出した。偽袋は二十数都府県に流れ，計五，六万袋に達し，さらに拡大する様相であった。飯塚米穀や山種産業などの川中業者が取り調べを受けた。

事件は事件として興味深いが教材解釈の発展にとっては事件が起こる背景が重要である。食管制度が形骸化した現在，米集荷業者は有名ブランド米に殺到する。県レベルで同一価格を設定して県内全農家に平等な収入を保障したいとの建前を主張する新潟県経済連・農協に対して，彼らは異なる価格設定基準を持っている。例えば新潟県産コシヒカリは，農協価格は一律60㌔22,500円，新潟農産販売24,000円，魚沼コシならばさらに1,000円高。別の業者では3,000円以上高とも言われている。業者の手元には県内を数十に分割し，それぞれに価格設定した価格地図がある。このような米の差別化は魚沼郡など品質に自信を持つ産地の不満（農協統一価格）と重なり，価格競争と集荷ルートの多様化に拍車をかけている。

事件は，特Ａランク米・魚沼コシヒカリの生産・流通・販売事情に便乗したものと言えよう。

ニセ宮城産ひとめぼれ事件も同様である。周知の通り，「ひとめぼれ」は宮城県経済連が91年度に市場投入した新品種の名称である。82年，宮城県古川農業試験場でコシヒカリを父に，初星を母に育種を開始し，改良を重ねて91年３月，県の奨励品種に指定した米である。正式品種名は「東北１４３号」である。『宮城県における平成２年度水稲及び畑作の作柄解析』（平成３年，宮城県農業センター）によれば，「超高級新銘柄米品種の開発・定着」にかけられている。また，注３紹介誌『農業富民』91年11月号での農林水産省の評価は，玄米品質はササニシキより良好で上の中，食味はササニシキに優り，極めて良好で上の上とされている。

ササニシキに替わる宮城県米のエースとして登場する「東北１４３号」も，市場評価を高めるた

めにネーミング公募が行なわれた。すでに，「きらら３９７」「あきたこまち」の先例がある。宮城県庁には全国から38,514点の応募があり，ネーミング審査会にかけられた。農業関係者，デパート企画担当者，女子大生，消費者団体なども加わった審査会は，わずか１通の「ひとめぼれ」を採用した。古川市在住の伊藤亘さん（62才）の命名である。伊藤さんの話では，「私は以前から稲の名前に興味を持っていました。コメを買うのはご婦人が多いでしょう。ですからご婦人方にイメージが良い名前がないかナ，と考えていてふと思いついたんです。いや，私はコメは作っていません」と証言している。ちなみに，応募名の多くは，例えば「だてにしき」「青葉・・・」「萩・・・」のように，旧藩や伊達政宗，県ゆかりの冠をつけたクラシックなものであったという。

このような準備を経て，いよいよ市場評価を受ける直前に事件が発生した。日本経済新聞によれば（91．11．23），ニセ米発生原因は“古川農試が原型種子を各県に一回限りの試験用として配布したものを流用，栽培した結果”とのことである。古川農試は「本物は91年度から配った一般栽培用種子から作ったコメだけ。試験用は栽培を繰り返すと品質の形質が失われる恐れがある」と主張・警告している。確かに，佐々木場長が「本当を言うと，私はまだ不満です。良いコメというのは，味が良いことはもちろんですが，収量が安定していて，寒さにも強いものでなければならないと私は思うのです。この点で，新品種（注・ひとめぼれ）はその条件をまだ十分に満たしているとは思えません」（『暮らしの手帖』91～92年・12・１月号）と言うように，“未完成”さは否めない。

それにもかかわらず，福島県白河地区や山形県内，宮城県白石市などで試験用種子を使った米が栽培され，ニセ宮城産ひとめぼれの出現に至ったのはニセ魚沼コシヒカリ事件・ニセきらら３９７事件と同じ生産・流通・販売事情が厳然として存在するからである(注4)。

宮城県では，対策会議を設置して生産農家から卸小売に至る流通ルート全般で種子管理の徹底に乗り出した。一方，岩手や福島も来年度以降積極的に作付けする計画という。全国で作られ，品質低下を招き，人気凋落したササニシキの轍を踏むとの懸念が早くも囁かれている(注5)。

4　新教材解釈の成立

「君たちはコシヒカリを知っているか」を実践した1988年以後，わずか３年間に，米をめぐる環境はこのように急展開した。そこで，教材解釈の骨格は基本的には変わらないが，設定した主要概念構造図（詳しくは第Ⅰ章で紹介した拙稿②④を参照されたい）にますます整備・収斂させた。

鳥取県産コシヒカリの市場評価に始まり，きらら３９７の躍進，ニセ魚沼産コシヒカリ事件・ニセきらら３９７事件・ニセ宮城産ひとめぼれ事件をも説明可能な教授書試案の作成を行なった(注6)。用意した概念的知識は「わが国の米作りは，川下の要求に合わせた『ブランド米』生産である」「川下の需要をいち早くつかみ対応することが，市場獲得につながる」というものである。（全国社会科教育学会第40回大会で田中・浦田が報告した試案は91年８月作成の第一次試案である。）

Ⅳ　教授書試案『米作り最前線』（第二次試案）

教授書試案；「米作り最前線」

小単元の目標

1．わが国の米作りは，川下の要求に合わせた「ブランド」米生産であることが説明できる。

2．川下の需要をいち早くつかみ，対応することが市場獲得につながることを説明できる。

	発　　問	資　　料	教授学習活動	予想される回答(子どもから引き出したい知識)
導入	1.君たちが知っている米の名前を発表しよう。		各自発表する。	・コシヒカリ，ササニシキ，きらら397，秋田こまち……
	2.米の種類は何種類くらいあるのだろう？	主な水稲うるち品種米歴一覧表	自由に予想する。	・1～10・10～20・20～50・50～100・100～500・500～1000・1000～ ・正解は1000種類以上であることを確認する。
	3.自分が食べている米の品種は何だろう？		(各自に家庭で聞き取り調査をさせておく)	・知らない・コシヒカリ ・秋田こまち・ヤマヒカリ (中米，標準価格米，自主流通米などの言葉も予想される)
	4.この中で，鳥取県で作られている品種は何だろう？	鳥取県水稲うるち米作付け品種		・コシヒカリとヤマヒカリ，日本晴
	5.グラフを見てわかることは何？	鳥取県米の主要品種作付け面積の移り変り		・日本晴が減ってきている。 ・コシヒカリが1986年から急増している。
展開	7.〈MQ1〉 1000種類以上もあるのに，なぜ鳥取県の米作りはコシヒカリ中心になったのだろう？		予想する。	・おいしい米だから・高く売れるから・有名だから・鳥取に適しているから
	8．予想を個別に追求しよう。		個別探求。	
	・味を調べよう。(食べてみよう。聞いてみよう。)	米の食味ランキングなど，実験授業時使用の資料各種		・おいしそう。 ・はっきりわからない。
	・値段を調べてみよう。(聞いてみよう。)			・他の米よりも高い。 ・同じコシヒカリでも産地によって値段が違う。
	・高い米なのに売れるのだろうか？			・おいしいのだろう。
	・有名かどうか，家の人や米屋さんに聞いてみよう。	店頭販売ＶＴＲ		・おいしい米として有名だ。 ・米屋さんの店頭での宣伝も派手だ。
	・栽培に適しているか，関係者にたずねよう。	鳥取農業事情(朝日新聞1988.1.5)		・倒れやすく，作りにくい米である。 ・日本晴のほうが作りやすい。 ・「鳥取県には適さない」と県農業試験場が述べていることを確認する。
	9．食べ比べをしよう。		鳥取コシヒカリとヤマヒカリの2品種を水加減を変えて4種類に炊き，目隠しテストで味比べをする。	・炊き方でずいぶん変わる。 ・コシヒカリだからおいしいとはかぎらない。
		8で使用の各種資料		・味は不確定なものであること，それにもかかわらず売れている事実を確認する。

終結	10.〈SQ〉 味は絶対的なものではないのに，なぜ売れるのだろう？			・おいしい米として売られているからではないか。
	11. おいしさの秘密を探ろう。	お話；謎の70万トン	教師解説。	・新潟県産コシヒカリの生産量は30万トン，消費量は100万トン。コシを3割混ぜると，コシの味，香りがするという。卸業者，小売業者ともマージンが高い米。消費者も求める米。
	12.〈MQ1〉(再度) なぜ，鳥取県はコシヒカリを増産するのだろう？	大阪市場の要請，抱き合わせの販売		〈MA1〉 鳥取県の主要出荷市場である大阪市場ではコシヒカリが流通の主力であり，大阪市場が売りたい米を増産した結果である。
導入	13. 計画通りの増産を行なった1990年度には，鳥取県産コシヒカリは大阪市場で高く売れたのだろうか？	新聞記事	予想する。	・高く売れた・売れた・売れ残った ・正解は「46%も売れ残った」であることを知らせる。
展開	14.〈MQ2〉 高く売れるはずであったコシヒカリは，なぜ売れ残ってしまったのだろう？		予想する	・他の県でもどんどん作り始めたからではないか。 ・同じコシでも，あまり知られていないからではないか。 ・鳥取県産コシは不作だったからではないか。 ・同じコシでも産地によって味がちがうからではないか。
		VTR；NHKリポート91・揺れるコシヒカリ王国	視聴する。	・より狭い地域での食味ランキングが出来ていること，米の販売の仕方が変わったことを確認する。
終結	15. 今，人気の米を調べよう。人気が出た秘密は何だろう？	VTR・新聞記事・業界誌(きらら397戦略，偽魚沼コシ事件，偽きらら事件，偽ひとめぼれ事件)	視聴する。	・ネーミングの秘密・マーケッティングの秘密・中間米と高級米の秘密
	16.〈MQ2〉(再度) なぜ，北海道産きらら397は完売し，鳥取県産コシヒカリは売れ残ったのだろう？			〈MA2〉 川下の需要をいち早くつかみ，対応することが市場獲得につながるから，中間米不足に対応した北海道産きらら397は完売し，過剰供給気味のコシヒカリは鳥取県産を含めて売れ残った。

Ⅴ　教授書試案の解説

教授書試案に示す論証過程は科学的探求過程の基本型である。(授業の実際では，しばしば変型が採用される。しかし，変型へのフレキシブルな転換を論理的に保障するのは基本型であり，基本型の構成なくして変型もありえない。)

本教授書試案は，計５時間扱いである。第１時，第２時は連続で実施する。まず，米の品種数当てクイズを行なう。現在までに開発され，登録されている品種数は1,000種を超す。しかし，実際に作付けされている品種数は限られている。とりわけ，コシヒカリ，ササニシキなどの数品種が圧倒的シェアを占めている(注7)。鳥取県における米作事情も同じである。作付け面積の推移を示すグラフから「1,000種類以上もあるのに，なぜ鳥取県の米作りはコシヒカリ中心になったのか？」という前半のメイン・クェッションを成立させる。予想を個別の探求活動に組織する。

第３時，第４時はコシヒカリの総合的研究を踏まえて食べ比べを行ない，おいしさの秘密を表記した４点に集約し，再度，メイン・クェッションを投げかけてメイン・アンサー１を引き出す。

第５時は後半の探求過程に相当し，今回新たに付加した部分である。鳥取県産コシヒカリは関係者の予想や期待に反し，大阪市場で売れ残ってしまった。「売れるはずだったコシヒカリは，なぜ売れ残ってしまったのだろう？」という後半のメイン・クェッションを成立させる。ＶＴＲにより作柄以上に過剰感が災いしたこと，コシ・ササ神話が崩壊し始めたことを確認させ，「きらら３９７」人気の秘密を紹介する。時間が許せばニセ魚沼コシヒカリ事件やニセきらら３９７事件，ニセ宮城産ひとめぼれ事件も概念化事例として組み込みたい。そして，最後にメイン・アンサー２を引き出す(注8)。

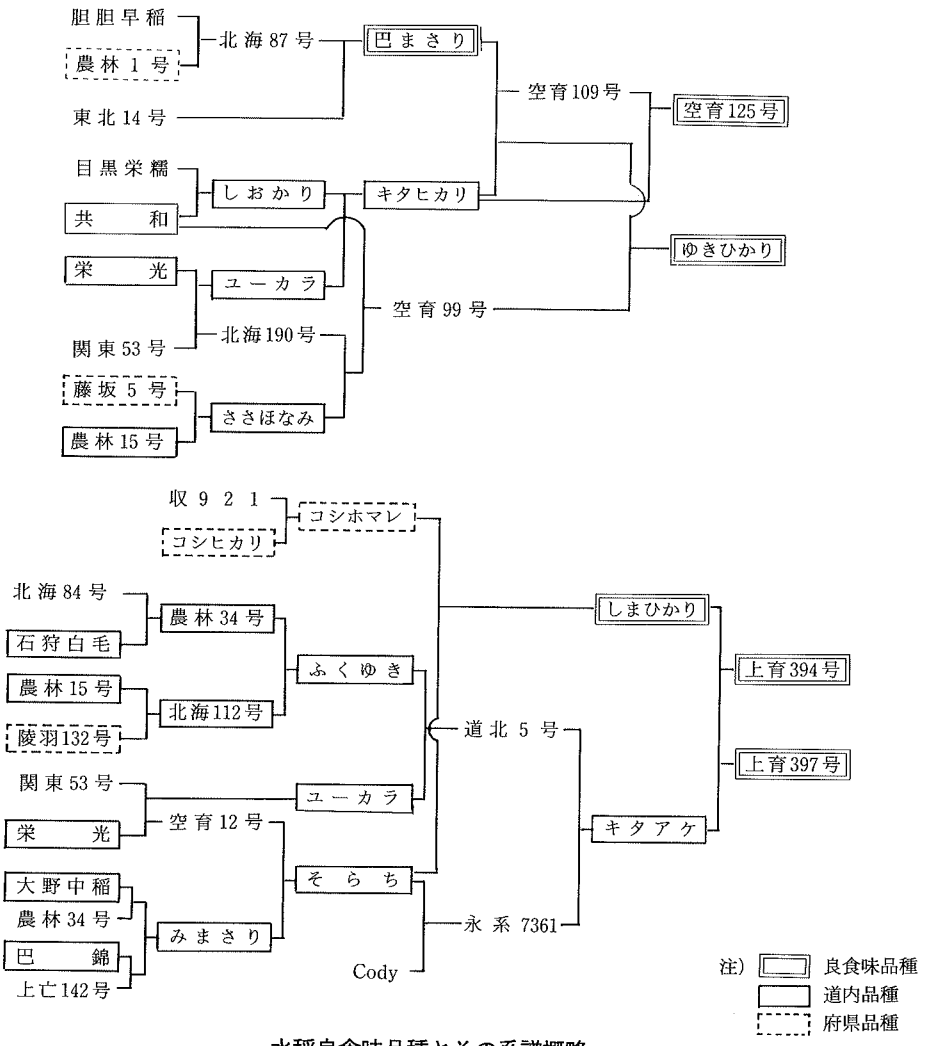
Ⅵ　今後の課題

本稿脱稿時点での「米作り最前線」事情は，ますます加熱する有名ブランド米作り（新品種開発も含めて）という表現で集約できよう。

また，視野を国外にまで拡げると，ウルグアイ・ラウンドでの米市場開放問題が行き詰まっている。わが国の米輸入拒否がいつまで通用するか，かなり難しい段階ではある。さらには，部分関税化後の国内米作産地生き残りシュミレーションも報道されている(注9-1,2,3)。

このような環境の中，各産地ともに新品種の開発競争や川下主導の販売戦略を一層強めざるを得ないであろう。鳥取県産コシヒカリの体験は米出荷県のどこにも共通する。1991年度，きらら３９７に似てネーミング公募が大流行であったことは，それを物語っている。

このような状況の中，教授書試案「米作り最前線」を実験授業にかけて整備し，５年社会科産業学習モデル（教授書）に完成させることが急務である。同時に，これまでの諸実践，教授書試案を総括的に説明する授業構成論を提示することや，批判が噴出して混迷を深め始めている日本型供給方式の今後を視野に入れた新社会科概念探求学習構成論の模索，構築も開始しなければならない。また，未公表の実践「冷凍サンマの秘密」も教授書試案化して報告したい。最新実験授業「ＰＯＳレジの向うは？」も同様である。これらについては別稿に譲りたい(注10)。



水稲良食味品種とその系譜概略

<注>

1　現在でも事情は変わらない。朝日新聞（91. 12. 3）によれば，全国地域婦人団体連絡協議会による食味テスト結果を紹介し，標準価格米と有名ブランド米に大差ないことを指摘しているし，「本当においしいご飯」とは何か疑問を呈している。

2　日本経済新聞（91. 10. 26）によれば，91年産米も相変わらずAランク米生産過剰感とBクラス米構造的不足感が強く，自主流通米価格形成機構入札も「Bクラス米上昇加速，下げ構造のAクラス米横ばい」と予測している。Bクラス米はブレンド（混入）米として必要不可欠な米である。特に，低価格を引き出すためにBクラス米のブレンド比率を高める外食産業からの需要が高いと指摘している。ちなみに，Aクラス米が主体になる家庭内消費は，86年の一人あたり年間60.5㌔から89年には55.5㌔と8％減った。76年比では22％の減少であ

る。一方，外食消費は89年に12.4㌔と86年比12%，76年比53%増加した。

91年９月東京で行われた第一回入札で，すでに福島・栃木・千葉県産初星，新潟県産トドロキワセなどの銘柄が基準価格（前年の落札平均価格）より1.4－3.0%上げた。

91年11月東京で行われた第二回目入札では，作況指数95（全国平均）の不作ということで各銘柄とも一斉に上昇した。それに伴い，コメ卸各社は12月から91年産自主流通米の小売店への販売価格を一斉に上げた。値上げ幅は60㌔当り七百円から千円（３～５%）。

92年１月の第三回入札では(日経92．１．10)，上場30銘柄のうち16銘柄が早くも年間の値幅制限である昨年の平均価格比７%いっぱいのストップ高に張りついた。北海道産きらら３９７などの低価格米は品薄感から10－20倍の競争率で，事実上の比例配分となった。

3　道南の稲作史と「きらら３９７」の特性は以下の通りである。

近年の道南の稲作は，1969年から始まる「米の生産調整」，78年から始まる「水田利用再編対策」，さらには87年から始まる「水田農業確立政策」によって大転換を遂げていく。

それまでの「マツマエ」「ともゆたか」といった多収品種時代から，「巴まさり」「ゆきひかり」といった良食味品種時代への転換である。

当然，水稲品種の育成目標もこれに対応した。すなわち，79年に90%以上を５類米に格付けされた道産米にとっては，国内最低品質米のレッテルを返上することが悲願であり，急務であった。80年からスタートした「優良米早期開発」７ケ年計画はまさしく道南稲作関係者の瀬戸際戦略であった。この計画の推進により「しまひかり」「ゆきひかり」「空育１２５号」「上育３９４号」などの11品種を育成し，さらには「上育３９７号」を開発したのである。

ここに至り，ようやく府県産米に匹敵する良品質良食味米「上育３９７号」が，５類の格付けで生まれた。実は，辻氏も指摘するように「低い格付け」ということが逆に利点になり，販売初年度の低価格戦略を生み出すことにもなった。「安くてうまい米」戦略である。

北海道道南農業試験場誌『創立80周年記念・最近の試験研究成果』より「水稲良食味品種とその系譜概略」図を再録すると前掲の通りである。（さらに詳しくは，北海道立中央農業試験場『北海道立農業試験場資料第19号・優良米の早期開発試験プロジェクトチーム第Ｉ期（昭和55～61年度）の試験研究成果』昭和63年を参照されたい。）

「上育３９７号」の特性は，①玄米はやや長粒で食味は「ゆきひかり」に勝る（上中上），障害型耐冷性はやや強で，いもち病耐病性や耐倒伏性もやや強，③草姿は止葉が直立し，下葉の枯れ上がりが非常に少ない，④検査等級３上，⑤アミロース含有率は新潟コシヒカリや宮城ササニシキの17～18%に対して，20%を超える，⑥アミログラム最高粘度は同じくコシ・ササの700～800B.U.に対して，580B.U.と低い。（「上育３９４号」は食味は上中と良好であるが，品質がやや劣る。）

新品種紹介を行なっている『農業富民』誌（富民協会・毎日新聞社）は，1990年６月号で，農林水産省農林水産技術会議連絡調査課記事として「稲・きらら３９７・登録2151号」を扱っている。玄米の見かけの品質は上の中，光沢は良，食味は上の中との評価を与えている。

なお，「上育」等の略称は，「上育」＝上川農試育成，「北海」＝農林水産省北海道農試育成，「空育」＝中央農試・稲作部育成，「渡育」＝道南農試育成，「北育」＝北見農試育成，「十育」＝十勝農試育成，「道北」＝上川農試指定試験育成，の「系統名」表現の略称である。「品種名」と区別して使用される場合と同一扱いの場合があり，さらには系統名は「Ｄ36」＝品種名は「キタアケ」と表記する場合もある。本稿でも適宜，表記している。

4　大阪での第三回入札（日経92．１．17）も，上場された39銘柄のうち29銘柄がストップ高に張りついた。鳥取県産コシヒカリも60㌔当り22,862円のストップ高であった。東京市場同様，不作による高値傾向が鮮明になったと報じられている。(朝日92．１．18)

しかし，気になる報道もある。92年１月23日「ＪＮＮニュースの森」は，「コメ談合疑惑を撃つ」と題して自主流通米価格形成機構入札における，売手＝全農・経済連と買手＝卸売り業者間での談合をスクープした。高価格形成を目論み，経済連から卸業者に希望入札価格が事前に伝えられたり，経済連から卸業者へリベート（○自販売対策費の項目で２億円強の金額が記入された卸業者確定決算報告書，各県経済連名と金額が明記されている雑収入明細書）が贈られているとのことである。この報道が事実とすれば，不作による高値という説明だけではなく，価格操作による不当な高値となる。ちなみに，自主流通米の20%が入札にかけられ，その価格が

残り80％の直接取引分の価格になる。消費者にとっては見逃せない価格決定システム・実態であるといえよう。（同局では１月26日の「報道特集」においてもこの談合を詳報した。十数の各県経済連がリベートを贈っている映像が紹介された。ここまで来ると，農業関係者の工夫や努力を賛美する社会科は，その実施がますます困難に思えてくるのだが。）

5　橋本利昭氏（毎日新聞仙台支局）は「'91宮城『ひとめぼれ』騒動記」（農業富民92．２）において，「ニセひとめぼれ」とは正規流通米である宮城，福島，岩手のそれ以外のものと説明している。また，ネーミング公募の外に「お披露目会」の開催や「本日売り切れ」広告戦略も紹介している。さらに，ひとめぼれは初星とコシヒカリを11代掛け合わせた品種が完成品であり，今回のニセ米の多くになった「奨励品種決定試験用」種は7-9代交配の未完成品種であったと述べている。

6　第一次教授書試案作成後にニセ魚沼コシ事件が発生し，学会発表を迎えた。ニセひとめぼれ事件の発生は学会発表後のことである。この事実は，概念的知識の妥当性の証明と判断している。なお，本稿は諸事件後に執筆したものであり，第二次試案は小山が作成した。

わが国の米生産－流通－販売－消費に関する歴史的整理は，鶴岡詳晃「消費者の利益の増進を目指した米需給政策のあり方についての一考察」（千葉経済大学『千葉経済論叢』第２号，1990年）を参考にした。

7　鶴岡論文および日本経済新聞（91．10．26）によれば，水稲うるち米主要品種の作付け状況は以下の通りである。（1989年産米までのデータは鶴岡論文から，90年産米は日経から引用し，小山が合成した。）

品種名	作付面積 (89年，千ヘクタール)	シェア	順位（順に90年，89年，88年，87年，86年，85年）					
コシヒカリ	472.3	25.4	※1	1	1	1	1	1
ササニシキ	202.0	10.9	※2	2	2	2	2	2
日本晴	142.3	7.7		3	3	3	3	3
ゆきひかり	70.7	3.8		4	5	8	24	33
あきたこまち	55.6	3.0		5	9	22	43	74
初　星	51.1	2.8		6	8	7	7	10
黄金晴	44.6	2.4		7	6	6	6	6
むつほまれ	43.7	2.4		8	45	63	100	—
キヨニシキ	39.8	2.1		9	7	5	5	5
中生新千本	30.8	1.7		10	11	12	15	15
（上位10品種累計）	1,153.0	62.1						
総合計	1,857.1	100						

※コシ・ササ合わせた作付面積は90年産で72万４千ヘクタール。86年産に比べて29％増加。シェアでも39.4％と12.5ポイントも上昇している。その分減少したのがＢクラス米で，日本晴だけをみても同期間に作付面積で35％減りシェアでも2.2ポイント落ちている。

8　今回の教授書試案後半は鳥取県におけるマーケッティング戦略の不十分さにも焦点を当てている。このような試案に対して次のような「批判」が予想される。「鳥取県の農業関係者の努力や工夫を理解させないものである」と。かつて「クロネコヤマト宅急便快進撃の秘密」学習に対して「特定企業に肩入れするもの」との的外れな「批判」を受けた。そこで，今回は事前に反論しておく。社会科は事実のより科学的な説明力を育成する教科である。そこでは，「努力工夫していること」を無批判・無条件に称賛することよりも，「なぜ，そのような努力や工夫をするのか？余儀なくされるのか？」を問い，社会のしくみ・構造・システムを明らかにすることが求められる。全ての事実・事象は批判的吟味にかけられて，より科学的・合理的な説明を成立させるための素材である。価値判断の対象ではない。事の成否の要因解明が求めれる。

もし，このような批判的合理主義的認識態度を排除して，無批判無矛盾無葛藤に「努力工夫を賛美する態度」を迫る社会常識教育に終始するならば，将来の意志決定も危うくするであろう。「ひいきの引き倒し」と言うが，この類いの「批判」にはこの言葉を返したい。

真に問われるべき論点（例えば，無批判賛美型授業構造＝閉ざされた社会常識教育としての構造を問う，設定した概念的知識と具体的事例との整合性を問う，等）を外して，批判者自身が価値判断を先行させて教授書

試案を眺める時にこのようなナンセンスな「批判」が生じるのであろう。この点に関しては，森分孝治広島大学教授の論文「対抗イデオロギー教育」(『社会科教育』明治図書，1992年１月号）を併せて参照していただきたい。イデオロギー教化推進論が「対抗イデオロギー」教育を理解できないところに，わが国の社会科教育をめぐる不幸や後進性がある。社会科教育研究における政治主義の払拭が急務とされる所以である。

9－1　関税貿易一般協定（ガット）のドンケル事務局長のウルグアイ・ラウンド裁定案を巡ってコメ輸入自由化論議が激しく行なわれている。伊藤隆敏一橋大学教授のまとめ（日経新聞92．１．10）によれば，輸入自由化反対論は，①食糧安保論としての反対論②国内で生産調整しているコメは現在のガットの枠内でも輸入制限が認められているとの立場の反対論③ＥＣの輸出補助金や米国ピーナッツ輸入制限品目を残して日韓に例外無き関税化を迫るのは不公平との反対論④水田は洪水防止貯水機能や緑地環境維持機能があるとの生態環境文化論からの反対論に整理できる。

一方，輸入肯定論は，①コメ農家の老齢化・後継者難でいずれ存亡の危機を迎える②輸入による競争を起爆剤にして規模拡大・効率的経営を目指す③品種改良による高品質米は低関税でも国際競争力を持っている④実際には調理用などとして消費量の0.5％程度は輸入されているなどの賛成論に整理できる。

両論者が直接に討論したのが，91年11月30日のＮＨＫスペシャル「緊急討論・“コメ”迫られる決断」であった。森島賢東大教授と叶芳和国民経済研究協会理事長の所論を取り上げてみよう。

森島教授は，カリフォルニア米「国宝ローズ」に対抗して生き残れる食味の国内産米はコシヒカリ（新潟，富山，福島），ササニシキ（宮城），あきたこまち（秋田）のみであり，しかも価格では太刀打ち出来ず，品質面で生き残れる可能性があると指摘している。量的には全国内産米の三分の一のみが生き残る可能性があると試算して，反対論を展開している。

「国宝ローズ」は森島教授によれば「山形・はなの舞」と同程度の食味という。

筆者の入手した文献に『のびゆく農業740世界市場における米の品質』(財団法人農政調査委員会87．7）がある。

同パンフレットは，国際稲研究所の国際稲研究会議(85．6)における討議結果「International Rice Research Institute. Rice Grain Quality and Marketing. 1985」の部分翻訳である。その中の「アメリカの稲品種とその粒タイプ，調理・加工特性，及び生産地域」一覧表を見ると，国宝ローズはエム401と並び「高級カリフォルニア中粒品質米」であり，他の中粒種同様に「民族的な用途」(十分精白された今搗りの短粒ジャポニカ米を好む日本の消費者）を意識した形質（大粒，外観及び食味，低アミロース・アルカリ崩壊度大・低糊化温度という物理化学性）を備えている。

ちなみに同パンフによれば，世界の米生産量の僅か５％が国際市場で流通し，中でも比較的広い市場をもつのは高品質長粒種米であり，中・短粒種は非常に狭い市場しかもっていないと言う。アメリカやタイは高品質長粒種米の輸出国であり，中粒種米である国宝ローズやエム401の場合もその生産地域はアメリカ西部(小規模)と表示されている。それにもかかわらず輸入関税化（初年度700％，10年後0％）によって国内産地の大半は壊滅的打撃を被り，完全に生き残るのは宮城県のみと森島教授は試算している。

一方，同討論とは別に『食料・農業問題全集全20巻22分冊』(農山漁村文化協会，1988年）編集委員会研究者グループに見られるようなマルクス経済学からの分析もある。河井一成東北大学農学研究所助教授は，「国際的に経済構造調整を行なわざるをえない世界資本主義の新たな矛盾の変化，その下での行革路線(“小さな政府”)，それに沿った農政の合理化－食管制度民営化追求」こそが最近の動向の本質であると言う。三島徳三北海道大学助教授も，「今日の権力側の食管『改革』の背景には，国際的な産業構造調整の一環としての国内農業の縮小再編政策がある。それは貿易摩擦を理由としたアメリカの要求であり，日本の独占資本の対応であり，いわゆる『前川リポート』(1986年４月）に沿って，『着実に輸入の拡大を図り，内外価格差の縮小と農業の合理化・効率化に努める』ためには，農地法とともに日本農業の制度的支柱である食管法の解体が不可欠なのである」「部分管理の徹底から間接統制の実現を目指し，最終的に現在の食糧管理法を廃止しようとするものである」と結論付けている。

9－2　先の森島見解と対照的な見解として叶氏の所論「農業・先進国型産業論」がある。(同名の著書が日本経済新聞社から1982年に出版されている。)

叶氏は，農業は情報化社会が達成された後に大きく技術革新する先進国型産業であり，日本のコメ作りも輸出産業になれる，そのためには食管制度を無くし，自由に農家が腕を発揮していくシステムを作ることが必要

と，工業としての農業像を提案する。新品種開発ラッシュと生産技術の平準化，直播によるコストダウンで国際競争力が持てるというのである。氏の立場からすれば，国内米産地間競争で淘汰され，生き残った産地のみが「産業化の出発点」にあり，求められる産地ということになる。

叶見解をより正確に理解するために筆者が目を通した氏の論考は以下の通りである。(論文名，掲載誌，発表年月の順)

①	51年度7%成長の可能性	経済評論　1976．6月号
②	雇用二重構造の再生	経済評論　1978．3
③	石油インフレ論批判	経済評論　1979．11
④	日本農業雑感	経済評論　1980．2
⑤	技術革新と市場原理－農業の国際競争力改善の方途－	農業と経済　1980．6
⑥	ニュージランド農業見聞記(下)	新農政　1980．8
⑦	農業革命を展望する	経済評論　1980．11
⑧	比較日本経済論	経済評論　1981．2
⑨	アメリカ農業事情	経済評論　1981．4
⑩	食糧安保は農業保護にあらず	ＥＳＰ　1981．7
⑪	農業は成長産業である	経済評論　1981．9
⑫	補助金漬けエサ米論を排す	週刊東洋経済　1981．10
⑬	農業自立戦略論批判に応える	経済評論　1981．12
⑭	草の根農政への転換を	経済評論　1982．8
⑮	食と農業と農村－「農業自立戦略」の立場から－	月刊ＮＩＲＡ　1982．11
⑯	日本農業を喰い物にする思潮を排す	中央公論　1983．2
⑰	ＥＣ農業事情	経済評論　1983．3
⑱	農業自立戦略の研究 (本提言は1981年７月21日に発表されている。)	ＮＩＲＡ政策研究　1984．6
⑲	アメリカと日本の経済見通し1985	経済評論　1985．1
⑳	旧体制を葬り，国際化へ向かって	農業と経済　1988．10

(なお，以上の諸論考の多くは上記の氏の著書に収められている。)

叶氏の見解は，「先進国型産業論」「四つの革命論(市場革命，土地革命，技術革命，人材革命)＝農業革命論」「政策革命論」「借地農業論」「輸出産業革命論」を柱にして構築されている。氏は産業組織論・経済予測の研究者であり，工業分野の経験（1960年代の貿易自由化，資本自由化➡技術革新➡重工業が世界の供給基地に成長)を農業分野に適用して以上の諸論を提案した。農業研究は1979年(総合研究開発機構NIRAからの委託研究)を起点にし，理論的骨格は1980年代初頭に出揃っている。氏自身の言によれば，近代経済学者セオドア・W・シュルツ氏（79年度ノーベル経済学賞受賞）の理論を継承，発展させて，産業構造論（比較優位分析）の次元に持ち込み，農業＝輸出産業化の着想に結実させたとのことである。

氏は「官主導方式の産業育成」批判例としてヤマト運輸(株)の宅急便事業を挙げている。「役所におもねず，既存業界の反対工作（注・路線免許取得は既存の運輸業者の既得権を侵害すると反対）には公取委に調査を申し入れるなど常に官にもの申すガラス張りの対応で障害を突破した」と。(日経92．１．14) 農業＝先進国型産業論における農政の役割とも一致した見解である。昨今も公団等の民活論を提案している。(NIRAニュース)

9－3　日本経済新聞（1992．１．６，１．８）は，「関税化はコメ保護に有効」とする政府部内意見の急浮上と，政権構想フォーラムの緊急提言「コメ生産費年2.5%削減，関税化受け入れ外国米と競争可能」を報じている。また，政府内には「コメ関税化・食管法改正せず受け入れ可能」(92．１．13) 論が浮上していることを報じている。国会でコメ輸入自由化決議が成立する見込みが乏しい現在，食管法第11条１項「政令で別段の定めある場合を除いて政府の許可」が必要とされる輸入規定を，政令で条件を定めればその条件の範囲内で自由に輸入が可能と解釈し，さらに政令を受ける農水省令の一部も改正(輸入許可が不要な重量の上限を大幅に引き上げ，用途も限定しない）しさえすれば，閣議決定と省令改正だけで済むというシナリオである。

内閣法制局見解でこのシナリオにストップがかかったが，ガットの今後の展開次第では蒸し返される可能性もある。

また，伊藤一橋大学教授は食糧安保論＝「一国完全自給論」を批判して，「集団安保論」＝「輸入先の分散化，備蓄の強化と生産の効率化」が求められるとしている。氏は「コメ輸入自由化問題は他国間協議で解決するか，日米二国間協議で解決するかの選択でしかない」と断言している。(日経92．1．13)

10　当面，授業構成論および日本型供給方式後の新産業パラダイムの探求を中心にした論考を準備している。

〈引用文献および参考文献の主要なものは，既に論文中で紹介したので省略する。〉

(1992年4月20日受理)